

ちくま新書「飯舘村からの挑戦」－自然との共生を目指して－ の本について、ぜひ読んでいただきたいための推薦文です。

この本の著者である田尾陽一さんはNPO法人「ふくしま再生の会」の設立者の一人であり、この会を代表する理事長をされています。私はこの会の一員として、ほぼ毎月他の仲間と飯舘村を訪れて、植物の放射能測定を続けてきました。

私の以下の文章はこの本の書評ではありません。私は著者の田尾さんとの60年にわたる交流を通して見てきた彼の生き方の集大成的な意味をこの活動に感じていることを述べたいという思いでこの文章を書きました。

彼は、東日本大震災直後から、物理を専門としてきた立場から、原発事故に関する情報収集を始め、この事故が現代日本最大の危機であると意見が一致した仲間や、私を含む友人たち16人を誘い、自分たちでできることを探ろうと、2011年の6月初旬に、福島県の放射能汚染地域への視察を敢行しました。

いわき湯本ICから北上した当時の海岸線には、波に打ち上げられた巨大な船や、海中から突き出た家やバスなど津波の爪痕が生々しく残されていました。

私たち一行は、最終的に、地元をよく知る方の案内で飯舘村の牛を飼う農家の菅野宗夫さんの家を訪問しました。

宗夫さんの「原発事故は明確な人災であり、原子力発電所はそもそも事故を収束する技術を持っているべきであり、村民が安心して農業を営み、生活する施策が打たれるべき」との主張に共感した私たちは、その場で、彼が提供することを約束してくれたこの地で、飯舘村復興のための「協同」を行うことを決めました。

これが「ふくしま再生の会」の始まりのエピソードです。

この本では、私たち会員がその後、毎週飯舘村へ通って、地域の放射能測定や、田畑や山林の放射能汚染の調査をしたことや、除染方法の試行錯誤等のすべての活動が丁寧に記録されており、興味深い内容であるとともに、記録としての価値が十分にあるものだと思います。

これを読んで私は、寒風吹きすさぶ冬の田んぼを掘って上下の土を採取したり、山の斜面の落ち葉を掻きとって、下の地面の放射能を測定したり、放射性セシウムを吸着している田んぼの粘土質部分を独特の方法で除去したりした初期の活動を懐かしく思い出しました。

その当時から、10年という月日が過ぎようとしています。その間に国が行う十分とはとても言えない除染が終わり、宗夫さんの家が建て替えられ、そこに私たちの作業所が作られ、手作りの放射能測定小屋もできました。

長い歴史を持つ佐須小学校の校舎が壊され、その跡地に待望の宿泊施設や交流の家が、会員のカンパや様々な組織による助成金で作られました。

田尾さん自らも、交流の家のすぐそばに家を建てて引っ越してきて、飯舘村の正式な住民となりました。近所の住民との良好な関係も作られてきました。

しかし、私は、この本の価値は、こういった今までの活動の綿密な記録にとどまらず、地方の農村の復興のあるべき姿についての彼独特の考えが随所に語られていることにあると思います。

「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし。」という田中正造の考えに共感し、正造の言う「真の文明」を持つ社会を飯舘村に構築したいという田尾さんの熱い思いが、この本に貫かれていると私は感じています。

この本の最終章の「地域を主役に、自然と人間が共生する社会へ」には、飯舘村のあるべき復興の未来についての彼の思いが述べられています。

私は、世界を動かしている資本主義経済のとめどない拡張が、地球環境を破滅的に破壊してゆくように見える現代において、自然と共存し、身の丈の生産や交流を通して「真の文明」を構築しようとする活動は、日本だけでなく、世界的にも意味を持つことだと期待しています。

この会に關与する田尾さんをはじめとする私たち初期のメンバーも、そろそろ 80 代になろうとしており、先行きが心細かったのですが、最近、田尾さんの娘さんをはじめとする、若い移住者がこの村で、新しい空間を創造することに取り組み始め、新しい村長がそれを後押ししていることは、私たちにとって何よりの朗報です。

願わくば、田尾さんがもうしばらく今のままの体力や知力を保ち、彼の理想とする飯舘村への意欲的な關与を続けて行って欲しいと思います。

田尾さんに関しては、東大闘争の後に大学を辞めた彼が、なぜ、セコムの CEO になったのか？また、それにしがみつかず、なぜ飯舘村の復興にかけるようになったのかという興味深い話があるのですが、その話は長くなるのでまた別の機会に。

岸崎晶子